

## 「天地創造」

菊田行佳

「神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らさせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である。」

(創世記1章16-19節)

子どもの成長は、ある時期を過ぎると急に速度を上げるように思えます。ついこの間まで、昼夜関係なく泣いたり、おむつを替えたり、てんやわんやしていたのに、気がつくや学校で宿題が難しくて頭をひねるようになりました。この間まで九九を覚えていたと思えば、今は割り算で悩まされています。端から見ていると、つい計算機を貸してあげたくなくなってしましますが、しかし子どもの将来のことを考えると、苦しくても今は辛抱の時だともちらも我慢するしかありません。

そのうち、きっと彼女はこう言うようになるに違いありません。「どうして、こんな宿題なんかやらなくちゃいけないの？意味がわからないんだけど」、その時、親としては大きく分けて3つの答があると思います。①「だって、やらないと先生に怒られるし、クラスで恥をかくでしょ！」②「だって、やらないと進学したり、就職できないでしょ！それでもいいの！」③「だって、よく勉強しとかなないと、世の中の面白いことが十分楽しめないでしょ！もったいないよ」 牧師の私としては、よく勉強しとかなないと聖書の内容がよく分からないよと言いたいところですが、しかしやぶ蛇になりそうなのでこらえたいと思います。

この3つの答えのどれかを選ぶというよりも、現実的なことを考えればどれもそれぞれ当てはまる事だと思います。ただ、それでも3番目の私たちの人生を少しでも豊かにしようとするという目的を見失ってしまったのなら、宿題することの魅力はどんどん下がって行ってしまおうと思います。

一見、割り算が何の役に立つのかわからなくて、宿題のモチベーションが保てなくなりそうですが、しかし数学などの自然科学の素養は世界が秩序立てて構成されていることを理解するのに欠かせないものとなっています。聖書の中にもその、なぜ世界はこのように造られているのかという疑問に答えているところがいくつもあります。冒頭の聖書の箇所もその一つです。ここでは、世界は7日間で神によって造られ、4日目に太陽と月や星々が造られたのだと記されています。このことは、理解の仕方次第で、進化論を肯定致します。つまり、神は物質を、より高次の段階へ常に進化し続ける能力とともに創造したのだと言えて、7日間の創造とは、進化の段階であるのだと考えます。神は原子のエネルギー

を爆発させて、そして4日目にはろくろを回すように宇宙の塵の渦雲から、天の川のらせんを引き出しました。そして神の手の中でガスが濃密になり、熱を持ち、太陽と月を形作ります。そして、孢子や種のように惑星をまき散らし、花のように彗星の種をまきました。

こうして造られた星々の中に地球があるわけですが、ここには草や木、鳥や魚や獣たち、そして人間などの生物が暮らせるような段階に、進化させてくれたのだと考えます。

もちろん、自然科学の素養だけではその成り立ちを知ることにとどまってしまう、この世界の造られている意味とか、目的などを理解することは出来ません。その領域に興味を持ったのなら、人文科学の方にどんどん進んでいって、私たち生きもの事柄、そして人間の事柄へと探求を進めて行くことになります。

社会生物学者は、人間の利他的な行動様式がどうしてあるのかに注目をしました。本来どの生物においても利己的な種の保存という命令が遺伝子の中に組み込まれています。それが利他的な行動を取る場合は、自らの遺伝的に血縁関係のある種、あるいはごく近い者を残すという目的の時によってのみ、見られます。しかし、人間だけはこの自らの血統や遺伝子を引き継がない者に対しても、利他的な行動様式を取ることがあるのです。

以前は、自然界の秩序は自然淘汰の原理によって成り立っており、簡単に言えば強い者が生き残り、弱い者は強い者の犠牲になって消えて行くように出来ているものと考えられてきました。しかし、それだけでは説明のつかない事柄が出てきて、実は、生物の進化の過程において、自然淘汰の原理が一時的に停止をすることがないと、生態系全体が崩壊してしまうのだということが解ってきました。

その最たる者が人間ということになるわけですが、人間ほど自然淘汰の原理と闘ってきた生物は他にありません。人間が発展させてきた文化という機能、あるいは技術と違ってよいものは、まさにこの自然淘汰の原理を克服するための人類の叡智だと言えます。血縁関係のない人間をも「兄弟姉妹」として受け入れ、たとえ自らの遺伝子や血統をそこに残せないのだとしても、自らを与えるという技術を習得してきたのです。これは、自然淘汰の原理を連帯の原理によって克服し、制限することによって達成されてきたことです。その文化の最終形態、あるいは生命の進化の最終形態として、「人間」の今があるめだとするのなら、私たち人間は、利己的遺伝子を制限し、利他的な奉仕と献身という技術によって生態系全体を保全し、維持・発展させて行く管理者の役目に神から選ばれたのだと言えないでしょうか。

宗教というのは、このような文化の中で自然淘汰の原理を制限して、連帯の原理に導く役割をするものです。聖書も、弱者や不適應者を生命プロセスから排除する自然淘汰の原理に抵抗することが、書かれた目的の大きな一つです。常に列強に脅かされながらも生き延びた弱小民族の苦悩と喜びが聖書には綴られています。消えそうないのちを憐れむ力を聖書は証言しています。聖書に証しされている創造の神は、自然淘汰の原理によって無とされるような存在を憐れむ神です。その神を知ることは、どのような小さな個人の生にも、意味を与えてくれることになるでしょう。ここに、聖書という古典を読む意味があると思えます。